近世の白話小説訓訳本に見られる終助詞「ヨ」について

About the sentence-ending particle“yo” of the glossed text of Chinese vernacular novels on Edo period

馬　静雯(MA JINGWEN)

【**Abstract**】In the middle of Edo period, the glossed text of Chinese vernacular novels which were added with glosses and “Left Firigana”(Aka “Sakun”) were published one after another. However, many researches have discussed the problem of the glossed texts during the middle of Edo period such as the Four Books and Five Classics. But there is few researches on the glossed text of Chinese vernacular novels. Especially, there are still some unsolved problems about the feature of the glossed text of Chinese vernacular novels. The purpose of this article is to elucidate a part of the feature of the “Right Firigana”(Aka “ukun”) of the glossed text of Chinese vernacular novels through consideration of the specific expression “yo”(ヨ). As a result, the appearance of the sentence-ending particle “yo”(ヨ) is closely related to the Chinese auxiliary letters “Li”(哩) and “Ye”(也) , especially “Li”(哩) in the original Chinese text. Although there are some common points on usage from the sentence-ending particle “yo”(ヨ) used in the colloquial language materials during the middle of Edo period and used in the glossed text of Chinese vernacular novels. It can be considered as there is a slight difference between each other. In other words, due to the sentence-ending particle “yo”(ヨ), the colloquial (Japanese style) at that time has an influence on the reading of the Chinese vernacular novels. This is also one of the features of the “Right Firigana”(Aka “ukun”) of the glossed text of Chinese vernacular novels.

【キーワード】近世、白話小説、訓訳、終助詞、「ヨ」

【Keywords】Edo period，Chinese vernacular novels，glossed text，sentence-ending particle, “yo”

1、はじめに

日本には中国の明清白話小説が江戸時代に輸入され、十八世紀の中頃には大流行するに至った。当時では、『通俗忠義水滸傳』のような漢字カタカナまじり漢文訓読調の訳本が出版されていたが、その他、四書五経、漢訳仏典等を読むために古くから使用されてきた訓読法に則り、白話小説の原文に返り点、右側に送り仮名、振り仮名を施し、また、左側に難解な語や短文の意味(左訓)を付ける訓訳本も世に現われた。

近世期における四書五経などの訓点本についての研究がかなりされてきたのに対し、白話小説の訓訳本に関しては、川島(2010)、勝山(2010)、丸井(2014)、村上(2014)、村上(2015)などの研究が見られるものの、決して多いとは言えない。特に各資料の訓点の性格については、訓点本の場合、村上(1975)、徳田(1990)、齋藤(2011)、石川(2015)などの研究により、かなり明

らかになったが、それに対し、訓訳本の場合、左訓の性格の解明を中心とした村上(2017)、終助詞から訓訳本の左訓と右訓の全体的な性格を考察した馬(2019)以外に、あまり見られないようである。訓訳本の訓点(左訓と右訓)の性格について不明な点がまだ多くあり、研究の余地があると思われる。本稿は訓訳本の右訓の性格の一端の解明を目的としたものである。

訓訳本は漢文訓読の範囲に属する一員として、その右訓に使用されている表現が、筆者の観察により、基本的には従来の漢文訓読語を継承しており、訓訳本と同時期の訓点本における表現とほぼ一致していると言える(「左訓」について別稿で述べたい)。しかし、やはり四書五経の文体と異なり、話し言葉に近い口語体で書かれた白話小説の訓点には、数が多くないが、同時期の訓点本に使われていない表現も見られる。例えば、「ヨ」、「ジャ」などである。これらの特異といえる表現から、訓訳本の右訓の性格の一端を窺うことができるであろう。そこで本稿では、訓訳本の右訓に現われている終助詞「ヨ」を中心に、その使用される原因、用法及び同時期の口語資料における終助詞「ヨ」との比較を通して、訓訳本の右訓の性格の一端を明らかにしていきたい。

2、調査資料

現存する近世期の白話小説訓訳本には、『覚後禅』(倚翠楼主人訳、宝永二(1705)年か[1])、「和刻三言」(『小説精言』(岡白駒訳、寛保三(1743)年)、『小説奇言』(岡白駒訳、宝暦三(1753)年)、『小説粋言』(沢田一斎訳、宝暦八(1758)年))、『照世盃』(清田儋叟訳、明和二(1765)年)があることが知られるが、ほぼこの五点に限られる。本稿はこの五つの訓訳本の影印を調査対象とする。書誌情報は次の通りである。

『肉蒲團』(一名『覚後禅』)
四巻、宝永二(1705)年か、倚翠楼主人訳、東京大学東洋文化研究所所蔵
『小説精言』(以下は「精言」)
四巻、寛保三(1743)年、岡白駒訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収
『小説奇言』(以下は「奇言」)
五巻、宝暦三(1753)年、岡白駒訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収
『小説粋言』(以下は「粋言」)
五巻、宝暦八(1758)年、沢田一斎訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収
『照世盃』
四巻、明和二(1765)年、清田儋叟訳、ゆまに書房『照世盃：付・中世二伝奇』(1976)所収

また、比較対象とする口語資料は、訓訳本とほぼ同時期(1739 年～1770 年)に出版された上方の噺本としたい。その理由は二点ある。まず、なぜ上方版かというと、訓訳本の訓訳者はおお

むね上方の者であるからである。岡白駒は播磨出身であり、その弟子である沢田一斎は京都の書店風月堂の主人であり、清田儋叟は京都出身である。そして、正体不明の『覚後禅』の訓訳者倚翠楼主人は京都長期滞在の陶山南濤である可能性が高い[2]。南濤でなくても、『覚後禅』の左訓に「カカ」「ホンマ」のような上方語が現われることから、その訓訳者は上方出身或いは長期滞在の者であることが分かる。次になぜ噺本を使用するのか。噺本は江戸時代における俗文学の一種であり、笑い話や小咄を集めた集成本である。「話が短い割には様々な位相の人物が、生き生きとした会話で遣り取りする」[3]と評価されている。また、この時期の洒落本、浄瑠璃が登場人物の位相上に偏りがあること、資料の量と出版時間の連続性などのことを考えると、噺本のほうが適していると考える。本稿では 1976 年東京堂出版の『噺本大系　第八巻』(江戸版の「軽口福徳利」「口合恵宝袋」を除く)を使用する。

3、訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の出現

本章では、終助詞「ヨ」の現われる位置を観察し、その使用される原因を検討する。

まず、訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の数量と分布の全体像を見てみよう。次の表 1 はそれを示したものである。

表 1　近世の白話小説訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の数量と分布[4]

	覚後禅	小説精言	小説奇言	小説粋言	照世盃
用例数	0	5	6	9	0
合計	20				

終助詞「ヨ」の例は全部で 20 件であり、岡白駒訓訳「精言」「奇言」及びその弟子である沢田一斎訓訳「粋言」のいわゆる「和刻三言」にしか現われず、『覚後禅』『照世盃』には全く見られなかった。つまり、従来の訓点資料に使われていない新たな訓読語は、いずれの訓訳本にも共通して存在しているのではなく、訓訳者の選択に関係しており、その使用が限られていると言える。

そして終助詞「ヨ」の出現位置をさらに詳しく示すと、次の表 2 のようになる。

表 2　「和刻三言」における終助詞「ヨ」の出現位置

	小説精言	小説奇言	小説粋言	合計
哩ヨ	3	5	7	15
也ヨ	0	1	1	2
ヨ也	2	0	1	3

20 例のうち、15 例は中国語の助字「哩」の振り仮名の位置にあり、2 例は助字「也」の振り

仮名の位置にあり、3 例は「也」字の補読語として現われている。表 2 から分かるように、終助詞「ヨ」の使用は中国語の助字「哩」「也」、特に「哩」の訓読に大きく関係している。ここでいう「也」は、文言の疑問・断定の助字「也」とは異なり、現代中国語の口語に用いられる「啦」に近いものである。「也」と「ヨ」の位置関係は不安定な状態にあるのに対し、「哩」と「ヨ」の位置関係は安定的であると言える。もちろん、「和刻三言」における「哩」が全て「ヨ」と読まれているわけではない(「精言」では、11 例の「哩」のうち、6 例が「ヨ」と読まれない。「奇言」では 6 例のうち、「ヨ」と読まれない例は 1 例のみである。「粋言」は「奇言」と同じ、8 例のうちm「ヨ」と読まれない例も 1 例のみである)。特に「精言」の場合、「ヨ」と読まない例が半数以上を占める。「精言」における「哩」を訓読する際に、訓訳者としての白駒は初出用例で「不読」としている。

(1)　將ニ十ー五ー貫ノ錢ヲ一給ニ一還ス原ー主ニ一。也タ只好シ奉ニ一與シテ衙ー門中ノ人ニ一。做ス二使ー用ト一。
モトノ　アタヘテ　ヤシキ　ツケトドケ

也タ還テ不レ勾哩。　「精言」巻一、十五ウ
マダ

二番目の「哩」に対しては、その前に「ゾヤ」を補読した。

(2)　煩ハス二小ー娘ー子ヲ一、回リ_云テ上ニ一覆セヨ親ー母ニ一。不レレ消ニ擔ー憂ヲ一。我_家ノ干ー係ハ大ナ
モチヒ　キヅカイ　コチノミニカヽリタルハ

ルソヤ_哩。　「精言」巻二、八オ

そして三番目の「哩」は「不読」、四番目の「哩」に至って初めて「ヨ」と読まれた。その後は「不読」と「ヨ」の繰り返しである。「奇言」「粋言」になると、「ヨ」と読むことがある程度固定されたといえる様相を示す。

しかし、全体的に言えば、やはり「和刻三言」では「哩」を「ヨ」と読む場合が多く、「ヨ」はある程度「哩」の訳語と見なすことができるであろう。

だが、このような「哩」を「ヨ」と読む例が、「和刻三言」以前の唐話資料には完全に見られなかったようである。代表的な唐話学者の一人である岡島冠山の編著による唐話辞書――『唐話纂要』(1716)、『唐譯便覧』(1726)、『唐話便用』(1735)を調査すると[5]、「哩」は全て「不読」とされている。また、唐話辞書のなかには、当時の言葉で原文を翻訳するものもあるが、その翻訳文を見てみると、『唐話纂要』『唐話便用』には、「哩」と対応すると見なすことができる語が見られず、『唐譯便覧』には「哩」と対応関係を持つ可能性の高い「ゾ」「ゾヤ」の例が多少見られた。つまり、この新たな訓読語「ヨ」の採用は、白話小説の訓訳本から始まったのではないかと考える。それでは、なぜ白駒は「哩」を「ヨ」と読んだのか。原因は当然いろいろあると思われるが、本稿では二つ取り上げたい。一つは「哩」は中国の古典作品にほ

ぼ見られない相対的に新しい語であり、訓読語は定まっていない。訓読者に対してその語にどのような訓を付けるのかに選択の余地が大きい。もう一つは、訓読する際に、訓読者が白話小説の文体の特徴(口語性)を考慮に入れた可能性が考えられる。言い換えれば、古典作品と異なる文体、古典作品にほぼない新しい語彙は、訓点資料に見られない新たな訓読語の創出に原動力を提供したのではなかろうか。

以上、訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の出現位置を示し、その使用される原因を検討した。終助詞「ヨ」は特定の訓訳本に限定されており、その出現は原文における助字「哩」「也」、特に「哩」の訓読に大きな関係を持っている。白話小説における、古典作品と異なる新たな要素は、この新たな訓読語の創出を促した。

それでは、訓読語としての「ヨ」はどのように使われているのか。同時期の口語資料における終助詞「ヨ」と比べると、何か共通点、相違点があるのか。それらの結果から訓訳本の右訓のどのような性格が分かるか。以下、「哩」の訓読語である「ヨ」を中心に検討していきたい(「也」については今後の課題としたい)。

4、訓訳本における終助詞「ヨ」の用法

先にも述べたが、訓訳本における終助詞「ヨ」の出現は「哩」「也」と深い関係がある。換言すれば、「ヨ」の使用場面、意味機能などは原文に大きく制限される。そのため、訓読語としての「ヨ」の使用状況を考察する前に、まず助字「哩」の用法を知る必要があると考える。以下、中国語の助字「哩」の用法を確認したうえで、訓訳本における訓読語としての「ヨ」の使用状況を考察する。

4.1　中国語の助字「哩」の用法

『康熙字典』には、「哩」について、次のように述べている(下線は筆者による)。

> **哩**玉篇力-忌ノ切，音_吏。出ツ二陀-羅-尼ニ一。正字通語ノ餘-聲。 又正字通音_里。元_人ノ詞-曲ニ，借テ為ス二助-語ト一。（以下略）　　『康熙字典』[6]

「哩」は実際的な意味のない「助語」であることが明らかである。

文末に使用されている「哩」の用法については、太田(2013)に詳しく述べられている。太田(2013)[7]は、元代の「哩」を以下の７種類に分けている。

1)「如今」「現(見)」「正」などと呼応するもの

　正在那裏吃酒哩（燕青博魚 3）(ちょうどそこで酒をのんでいる)[8]

2)「如今」などはないが、同様に動作状態の現在における存在をいうもの

　爹喚你哩（來生債 1）(おとうさんがよんでいるよ)

3)瞬間動詞「着」を用いた句につくもの

你看，他穿着甚麼衣服哩？（墻頭馬上 4）（みてごらん、どんな着物をきているか）

4)「還」を用いるもの

還有一個哩（燕青博魚 4）（まだ一人いる）

5)「還」は用いないが同様の語気をもつもの

你如今年紀小哩（救風塵 1）（おまえはまだ年がわかい）

6)「未」の意味をあらわす副詞「不曾」「未曽」「没有」などを用いるもの

未曽娶妻哩（玉壺春 1）（まだ妻をもらっていない）

7)精警

這沙門島好少路兒哩（瀟湘雨 4）（この沙門島はとても遠い途のりなんです）

若打醒了睡，要打我哩（瀟湘雨 4）（もし目をさまさしたらわたしは打たれるのです）

また、太田(2013)は、このうちの 1)～6)は現在におけるある動作・状態の存在、或いは不変化を明確にいう叙実的用法のものであるのに対し、7)は「精警」(ある事態の存在を指摘して聴者の注意を促す語気[9])と呼ばれる非叙実的用法のものであると指摘した。

各種類に示されている用例から見れば、叙実的用法の「哩」の前接情報は、必ず話し手及びそれ以外の人も確認できる、認められる、そしてその事態に対する認定に個人差の存在が許容されない客観的な事実である。それに対し、非叙実的用法の「哩」の前接情報は話し手の判断、予想の事態など、話し手以外の人が確認できない、あるいは物事に対する認識に個人差が存在しうる(距離の遠近など)主観的な内容である。太田(2013)に指摘されている「叙実的用法」「非叙実的用法」は恐らく「哩」の前接情報の客観性主観性によって区別されたのであろう。つまり、前接句が客観的な情報内容である場合、「哩」は叙実的用法の「哩」である一方、前接句が主観的な情報内容である場合、「哩」は非叙実的用法の「哩」である。

しかし、以上示した種類或いは用法は、全て聞き手の存在する会話文に使用される「哩」に対していうようである。

4.2 訓訳本における「哩」(「ヨ」と読む場合)の種類

訓訳本には、会話文の例以外に、太田(2013)に言及されていない、聞き手が存在しない心内文の例も見られる。

会話文に現われる「哩」は 10 例あり、主に次の五種類に分けられる。

A 「如今」「現(見)」「正」などはないが、現時点の動作状態の存在をいうもの(2 例)

B 「還」と呼応するもの(2 例)

C 「要」、または「要」はないが、同様の語気を持つ語句と呼応するもの(3 例)

D 「若」、または「若」はないが、同様の語気を持つ語句と呼応するもの(2 例)

E その他(1 例)

そのうち、Aは太田(2013)に指摘された2)に相当し、Dは7)に相当する(Bの「還」は「マダ」の意ではなく、「マタ」の意である)。

心内文の「哩」は5例あり、四種類に分けられる。

F 「還」と呼応するもの(1例)

G 「若」と呼応するもの(1例)

H 「如何」と呼応するもの(1例)

I その他(2例)

次節では、「哩」の訓読語としての「ヨ」の使用状況を、共起と接続、使用場面から考察する。

4.3 訓読語としての「ヨ」の使用状況

4.3.1 共起と接続

中国語を訓点によって日本語に変換すると、原文における言葉と言葉の呼応関係もそのまま保留された場合が多いが、呼応関係が見られなくなったり日本語にしか現われない新たな共起表現が生じたりする可能性もある。

B(F)、C(「要」のある場合)、Hの場合、訓読文にはそれぞれ「還テ……ヨ」「……要スルヨ」「如何ンカ……ヨ」になり、原文の呼応関係をそのまま写した。それに対し、A、C(「要」のない場合)、E、Iの「哩」、そもそも原文にはそれと呼応する言葉がないので、訓読文にも「ヨ」と共起関係を持つ語が見られなかった。また、D、Gの場合、原文に「若」があれば、訓読文における「ヨ」も必ずしも「若シ」と共起するが、「若シ……バ、……ヨ」或いは単純に「……バ、……ヨ」のような表現も見られた。これらの共起関係は、同時期の四書五経の訓点本及びそれ以前の訓点資料には全く見られず、漢文訓読の範囲内では新たに生じた表現である。

また、接続の面から見れば、「ヨ」は概ね「動詞連体形」「形容詞連体形」「助動詞連体形」に付く。具体的に示すと、次の表3になる。これらの接続法は同時期の口語資料と共通しているかどうか、後の5.1に述べる。

表3 「哩」の訓読語としての「ヨ」の前接語(()内は用例数)

前接語		合計
動詞連体形	相打ス(1)、有ル(1)、見ル(1)、要スル(3)、結束スル(1)、哄騙スル(1)	**8**
形容詞連体形	多キ(1)	**1**
助動詞連体形	タル[持続](1)、ナル[断定](2)、ン[意志](1)、ン[推量](2)	**6**

4.3.2 使用場面

訓訳本の原文における「哩」は、会話文の場合、確かに太田(2013)に指摘されたとおり、叙実的用法と非叙実的用法がある。言い換えれば、「哩」の前接情報は客観的である例もあれば、

主観的である例もある。しかし、訓訳本の「哩」の前接情報はいずれも話し手に対して既知的、聞き手に対して未知的であり、話し手と聞き手の間にその情報に対する認識の差が存在している。この点は疑問文にも使われる太田(2013)に示されている「哩」とはやや異なる。以下、用例を示しながら、訓訳本の「哩」と「ヨ」の使用場面を具体的に述べる。

まず、叙実的用法の「哩」の用例を示す。

(3) 丫ー鬟着シ_了テ忙。奔テ到二房ー中ニ一報二ー與シテ劉ー璞ニ一道。大ー官ー人不ー好ー了大ー爺大ー娘在二新ー房ー中ニ一相_打ス哩。 「精言」巻二、二十五ウ

(4) 劉ー天ー祥也タ哭シ_了ル一ー場、就チ喚ヒ二_出シ楊ー氏ヲ一、來テ道、大ー嫂、侄ー兒在テレ此ニ見ルレ你ヲ哩。 「粋言」巻四、十二オ

(3)は下女が主人に「主人の両親が喧嘩している」ことを教える場面である。「大官人」の父は娘が騙されたことを知り、それは自分の妻のせいだと思っているので、妻に対していろいろ文句を言った。妻は非常に怒っており、夫をののしって突き倒した。そこで、夫婦二人は殴り合いの喧嘩になった。下女は慌てて主人の部屋に入って「旦那様、大変です！お父様お母様は殴り合っていますよ！」と報告した。(4)は男が妻に「甥が来た」ことを教える場面である。話し手の甥は三歳から父母と共に故郷を離れており、十五年後、甥は自分一人で故郷に戻った。話し手は十余年も見たことのない甥に会うと、自分の妻を呼んできて、「甥が今ここにいて、あなたに会いたがっているよ」と妻に教えた。(3)、(4)の原文における「哩」の前接句は実際に存在している進行中の動作状態である。そして、話し手と聞き手がその情報に対して、認識の差が見られる。(3)の「主人の両親が喧嘩している」ということは話し手「丫鬟」に対して既知の情報であるが、聞き手「大官人」に対しては未知の情報である。(4)の「甥が今ここにいる」「あなたに会いたがっている(あなたの出現を待っている)」という情報は、実は話し手の妻のほうが先に得ていたが、妻はまだ話し手に告げていなかったので、発話時の話し手の視点から見れば、その情報は話し手に対して既知の情報であり、聞き手の妻に対してまだ未知の情報である。

叙実的用法の「哩」は以上の二つしかない。残った8件の「哩」は全て非叙実的用法と見なすことができる。

(5) 又一ー個ハ道、只_怕這ノ_雪還テ要スルレ大ヲ哩。 「奇言」巻四、二十一ウ

(6) 對二船ー上ニ一大ー喝シテ道、不レレ要セ二零ー賣ヲ一、不レレ要セ二零ー賣ヲ一、是レ有ル的俺多ク要ス

レ買ンヲ、俺カ家ノ頭ヤクニン目、要スル三買ヒ_云テ進ニ可コク汗カンニ一哩ヨ。　「粋言」巻二、十三ウ

(7)　要スルレ看ント時ハ。你ミ自_云テ看ヨ。老娘ヲレラハ要スルニ睡ヒ覺ヲ一哩ヨ。　「精言」巻四、十五ウ

(8)　央ニ及スル他ヲ一時、還マダテ有ルニ許ヒ多ノ作ナンギ難一哩ヨ。　「奇言」巻四、十八オ

(9)　張ヒ大搗ツイテニ一ヒ个ノ鬼メツソフヲ一道、依レハニ文ヒ先ヒ生ノ手ヒ勢ニ一、敢タブンハテ像ニタルレ要スルニニ一ヒ萬ヲ一哩ヨ。

「粋言」巻二、二十三オ

(10)　大ヒ家目ミナ＼＼_睜ミハリ口_呆アキレ、都テ立チ起シニ身ヒ子ヲ一來リ、拉イザナヒニ文ヒ若ヒ虚ヲ一云タンカウ商ヒ議スラク道、造ヒ化シアハセ造ヒ化シアハセ、想ニ是レ値リ_得テ多キ_哩ヨ。　「粋言」巻二、二十三オ

(11)　若シ蒙ルニ員ヒ外如ノレ此美ヒ情ヲ一、我レ夫ヒ妻フタリ両ヒ口、住ニヒ在シテ這コヒ里ニ一可ナリ、也タ増ンニ好シ些ノ光ヒ彩ヲ一哩ヨ[10]。　「粋言」巻四、六ウ

(12)　若シ果シテ侄ヒ兒來ラハ、我也タ懽ヒ喜、如_何シテ肯テ阻ニヒ當センヒ他_的ヲ一、這コツジキワノ花ヒ子サト故ヒ意ニ來テ捏シレ舌ヲ、哄スカシニヒ騙スル我カ_們的シンダイノ家ヒ私ヲ一哩ヨ。　「粋言」巻四、十三オ

(5)は結婚式に参加する一人の客の話である。結婚式が終わり、花婿が花嫁を連れて船で自分の住宅に帰ろうとする際に、「今、風が非常に強い」と言われる。そのことを知った衆人は、「この風、すぐにはおさまらないだろうなあ」「こんな雪の降る日、風がなくても恐らく船に乗れないだろう」とあれこれ自分の考えを述べ始めた。(5)の話し手も「恐らく雪がこれからもっと強くなるだろう」と言った。(5)の原文における「哩」の前接情報は話し手が眼前の事態の進展に対する推測であり、主観的な内容である。

(6)の話し手は珍しい果物を買った後、しばらくしてまた買いに戻った者である。話し手が言った「売らないで！売らないで！残りは全て俺が買う。わが主人は、それを可汗に差し上げたがっているよ」は、話し手個人の要求、未発生の事態であり、主観的である。

(7)はずっと自分の娘のことを心配している男が寝ていたところ、突然いやな予感がして、妻を呼んで起こし、「一緒に娘の部屋に見に行こう」と言った場面での、妻の答えである。「行きたいなら、あなたが自分で行きなさい。私は寝るよ。」という意味である。「哩」の前接句は話し手が自分の意志を表わすものであり、主観的な情報である。

(8)～(12)の数例も同じく、「哩」の前接情報は話し手が眼前の事態に対する判断・推測・評価などであり、いずれも主観性の強い内容である。そして、それらの情報内容は、話し手が発話する前には、話し手しか知らないので、全て話し手に対して既知的、聞き手に対して未知的である。やはり非叙実的用法の「哩」の使用者(話し手)と聞き手の間にも「哩」の前接情報に対して認識の差が存在している。

会話文の「哩」の訓読語としての「ヨ」の使用場面も、もちろん原文からの影響を受け、「哩」と同じである。

また、先にも述べたように、訓訳本には、太田(2002)に提示されていない心内文の「哩」も現われた。すなわち次の5例である。

(13) 今在テ二絶ニ島中ニ間ニ一、未レ到二實ニ地ニ一、性ニ命モ也タ還テ是レ與二海ニ龍ニ王一合ニ着スル的ナル哩。

「粋言」巻二、十八オ

(14) 等チ二一了一ニ夜ヲ一、不レ見二動ニ静ヲ一、心ニ下好シ一悶ス、想ヘラク一道、這一等ノ大ニ風、到是レ不レハ二曽下一レ舩ニ還テ好シ、若シ在テ二湖ニ中ニ一行ニ動セハ、老ニ大ノ擔ニ憂ナラン哩。

「奇言」巻四、二十五ウ

(15) 錢ニ青肚ニ裏暗ニ笑一道ヘラク、他カ一們ハ好シ似レ見レ鬼ヲ一ニ般、我ハ好シ像レ做カレ夢ヲ一ニ般、做レ夢ヲ的ハ醒一了レハ也タ一只扯レ淡ヲ那ニ些ノ見レ神ヲ見レ鬼ヲ的ハ、不レ知如一何ンカ結ニ束スル哩。

「奇言」巻四、二十ウ

(16) 若シ我カ丈ニ夫像二一得バ他カ這ニ様ノ美貌ナルニ一。便チ稱ナヒ二我一的ノ生ニ平ニ一了ル。只一怕クハ不ン二能一勾一哩。

「精言」巻二、十三ウ

(17) 心ニ中ニ想ヘラク一道、此一子如レ此ノ、其一姉可レ知ル、顔ニ兄好シ造ニ化ナル哩。

「奇言」巻四、十四オ

(13)は「今は絶島におり、まだ陸に上がっていないので、私の命もまだ海龍王に左右されているのだ」という意味である。(14)は「こんな強い風、もしまだ出航していなかったら、まだ大丈夫だが、もしもう出航してしまっているなら、本当に心配になるよ」という意味である。(15)の話し手は心のなかで「彼らは化け物を見たようで、僕は夢を見たようだ。夢を見た人は

目覚めたら、何もないが、それらの鬼神を見たような者は、どうなるのか分からない」と思っている。(16)は話し手が自分の兄嫁の顔を見て、心のなかで「私が夫はもし彼女のような美貌を持つなら、すなわち満足するのだ。いや、恐らくだめだろう。」と思っていた場面である。(17)の話し手は友達が気に入った女の子の兄を見て、「この方の格好から、そのお姉さまの格好を知ることができる。顔さんは運がいいんだなあ」と思っていた。これらの心内文における「哩」の前接情報は非叙実的用法の「哩」と似ており、すなわち話し手が眼前の事態に対する判断・推測・評価などであり、主観的である。しかし、聞き手が存在しないので、その情報は単に「哩」(訓読語「ヨ」)の使用者に対しては既知的である。

以上、「哩」及びその訓読語「ヨ」の使用場面を考察した。まとめると、次の二点になる。

① 訓訳本の原文の会話文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、話し手が眼前の客観的事態或いはその事態に対する判断・推測・評価など、話し手に対して既知、聞き手に対して未知の情報を聞き手に伝える場合、つまり話し手と聞き手がその情報に対して認識の差が存在している場合に使われている。

② 訓訳本の原文の心内文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、話し手が眼前の事態に対する判断・推測・評価など主観的で、そして話し手自身にとって既知の情報を、自身に言い聞かせる場合に使われている。

5、同時期の口語資料における終助詞「ヨ」との比較

それでは、訓読語としての「ヨ」は、同時期の口語資料(噺本)における終助詞「ヨ」とは、何か共通点、相違点があるのであろうか。

訓訳本とほぼ同時期の噺本には、24 例の終助詞「ヨ」が見られる。しかし、訓訳本の「ヨ」の共起語と同じであるものはない。接続から見れば、両者の間には大きな差異が見られる。次の表 4 は噺本における終助詞「ヨ」の前接語を示したものである。

表 4　噺本(1739～1770)における終助詞「ヨ」の前接語

	軽口耳過宝	軽口若夷	軽口瓢金苗	軽口笑布袋	軽口浮瓢単	軽口腹太鼓	軽口東方朔	軽口扇の的	軽口片頬笑	合計
	1742	1742	1747	1747	1751	1752	1762	1762	1770	
名詞	5	1		2		3	2	4		17
副助詞			1							1
終助詞						3			1	4
動詞命令形					1					1
助動詞連体形								1		1

表 3 で示した訓訳本の「ヨ」の前接語が全て活用語の連体形であったのに対し、表 4 から分かるように、噺本の「ヨ」は主に名詞に接続する。訓訳本の原文における「哩」の直前が名詞である例((13)(17))もあるが、訓読文になると、名詞と「ヨ」の間に断定を表わす助動詞「ナリ」の連体形「ナル」が添加されている。つまり、訓訳本には、「……名詞＋ナル＋ヨ」があるが、名詞の後に直接付く「……名詞＋ヨ」の組み合わせがない。では、日本語の歴史上、「ヨ」の接続はどのようだっただろうか。「日本語歴史コーパス」を使用して調べると、『源氏物語』には既に「ナルヨ」の用例が見られる。

(18)　さまざま心細き世の中のありさまを、よく見過ぐしつるやうなるよ。

『源氏物語』若菜下、1010

しかし、江戸時代になると、口語的な断定表現の発達に従い、「ナリ」の文語性がさらに強くなったためか、筆者の調査範囲内では、「ナルヨ」の用例が見られなくなる。一方、噺本には、1 例ながら、「助動詞連体形＋ヨ」の例がある。

(19)　石をかぐ事てハおりない。鼻を碁いしに腰かけさするよのといふた。

「碁うちの癖の事」『軽口扇の的(五)』、1762

話し手は碁を打っている者である。『日本大百科全書』には、「文化・文政・天保（1804～44）から幕末にかけて、碁は繁栄期を迎えた。名手、高手が輩出する一方で、碁が商人、一般庶民の間に浸透していった」[11]という記述が見える。つまり、19 世紀以前、碁打はまだ一般階級に及んでおらず、一定の社会的地位を有している者の遊戯である。そのため、(19)の話し手は一般階級より身分の高い人だと推測できる。このような人の話に現われる「助動詞連体形＋ヨ」は平民も使われている「名詞＋ヨ」より文語的性格がやや強いのではないかと考えられる。それはすなわち訓訳本における「ナル＋ヨ」は文語的な接続法であることを意味している。

以上の考察から分かるように、全体的には、訓訳本の「ヨ」は翻訳語として、その前接部は原文に制限されており、噺本と大きく異なっているが、「連体形」に接続するという接続法は同時期の口語資料にも見られ、文語(或いは和文脈と言ってもいい)との共通点が認められる。

次に、「ヨ」の使用場面を見てみよう。

会話文に現われている「ヨ」は、22 例である。

(20)　或夜(ある よ)、順慶町辺(じゅんけいへん)のどぶ池(いけ)すじにて、そりやぬいたぞ。あばれものよと往来(わうらい)にげまどふ中に、……

「鍛平物(だんびらもの)」『軽口腹太鼓(二)』、1752

(21)　夜更(よふけ)て火事(くわじ)よとさわぎけれハ、或家の亭主(ていしゅ)はやくきゝつけ、……。

「六　助蔵火事(すけさう くわし)見る事」『軽口扇の的(二)』、1762

(20)と(21)は「ヨ」の前接情報が客観的な事実の叙述である例である。(20)は「鍛平物」と

いう噺の最初の部分である。後文脈によれば、話し手(一人か複数の人か不明)は、手に刀を持ってふらふらと歩いてきた酔っぱらいを見て、「あばれものよ」と叫んだ。この「あばれもの」は手を持つ酔っぱらいに対する叙述であり、話し手に対して既知の情報、周りの人という不特定の聞き手に対して未知の情報である。(21)も噺の最初の部分にある。夜更けて「火事(が起こった)よ」と誰かが叫んだ。話し手は不明であり、火事の目撃者なのか他の人から火事のことを知った者なのかも分からないが、「火事が起こった」ことはその場の誰でも確認できる客観的な事態であるうえで、話し手に対して既知、聞き手に対して未知の情報である。(20)、(21)における終助詞「ヨ」は、話し手と聞き手が「ヨ」の前接情報に対する認識の差がある場面に使用されている。

「ヨ」の前接情報が主観性の強い内容である場合も同じである。

(22)　ハテ、しれた事よ。おめこの事じやといふところへ、……

「御命講」『軽口耳過宝』(五)、1742

(23)　そりやこそ偽(にせ)よと口突(どつ)と笑(わら)へバ、……　「天犀角(うにかうる)」『軽口腹太鼓』(四)、1752

(24)　一人(いちにん)きつと心(こゝろ)つき、あれ＼／見給へ。あれこそ住吉の明神よ。

「くまの浦」『軽口腹太鼓』(五)、1752

(25)　あやまりもせず口(くち)がしこくいふ事よといへば、……

「高砂(たかさご)の浦(うら)」『軽口耳過宝』(五)、1742

(22)はある人が新参の出産の見舞いに行って、下女は「無事で安産いたし、殊に門開で御ざる。……」の「門開」の意味が分からず、「どういう意味か」と聞いた場面での、その人の答えである。(23)はある人が、友達が持っている天犀角は本物であるかどうかを、ムカデで検証しようとそそのかし、友達がいろいろとしてみたがムカデに何も反応がないのを見た場面での、その人の話である。(24)の聞き手は強風に遭った船人であり、船人たちが強風がおさまったのを悦んでいる際に、中の一人が突然に「あれを見てくれ。あれこそ住吉の明神だよ」と言った。(25)は話し手の眼前の事態に対する評価である。手代の四郎助が手形金百両を受け取って帰る途中に落としたので、主人がとても怒っているが、「もし一分の申し訳さえたたばゆるすべし」と四郎助に言ったところ、四郎助は「不調法は年来のよしみに御免くださるべし」と答えたので、主人は「謝りもせずに口賢くいう事よ」と、四郎助の答えを評価した。「ヨ」の前接句はいずれも話し手が眼前の事態に対する判断・評価などであり、「ヨ」の使用者(話し手)と聞き手の間に認識の差がある。

以上の例以外に、噺本には、訓訳本に見られなかった命令文に現われる例も数例ある。「ヨ」の前接句は話し手個人の要求という主観性の強い内容であるため、以上に述べた(21)～(24)における「ヨ」の使用場面に条件が共通する。

(26)　薬(くすり)を温(ぬく)めて持(もつ)てこいよといハれけるを、……

「薬ちがひ」『軽口浮瓢単』(三)、1751

(27)　そのやうにけつこうに、おしやますなよ。　「鞁買」『軽口腹太鼓』(一)、1752

一方、噺本の心内文に現われる「ヨ」は、次の2例しか見られなかった。この場合の「ヨ」は、訓訳本の心内文に現われる「ヨ」の使用場面とはほぼ同じである。

(28)　手拭(てのこい)をかづき菅笠(すげかさ)に、うちわをとりそへ持てゆくうしろすがたを見て、こハ女よとおもひ、……　「六　赤前垂(あかまえだれ)にはまる事」『軽口扇の的』(四)、1762

(29)　是ぞ井のもとの道具(たうぐ)の名なれば、水がらくりよと心得(こゝろえ)、……

「六　水がらくりを見にゆく事」『軽口扇の的』(五)、1762

(28)の話し手は遊蕩者であり、色が黒くて鬚がたくさんある住吉踊りのはなれ者に出会ったが、頭に手拭いを載せて菅笠をかぶって手に団扇を持っている後ろ姿を見て、「これは女だ」という判断を出した。(29)は話し手がある芝居の看板における「洛中御評判の轆轤首」を見て、「これは井のまわりの道具の名前ならば、すなわち水がらくりというものだ」と思っている場面である。(28)と(29)における「ヨ」の前接句は、話し手の目の前にある物事に対する個人的な判断である。

以上、噺本における終助詞「ヨ」の使用状況及び訓訳本の「ヨ」との異同点を考察した。翻訳語としての「ヨ」は、原文からの制限を受けているため、共起関係及び接続の面では、当時の口語資料と比べると、確かに異なる所がある。しかし、「連体形に接続する」接続法及び使用場面に共通している。一方、意味用法においては、全体的に、両資料における終助詞「ヨ」は用法上に大きな差異が認められなかった。それはすなわち、当時の口語に実際に使われている終助詞「ヨ」の用法が、中国の白話小説に使用されている助字「哩」の用法と類似していることを意味している。言い換えれば、当時の実際の言語環境(和文脈の言語表現)は「ヨ」が「哩」字の訓読語に選定される基盤を作った。訓訳本に現われている新たな訓読語は、同時代の口語からの影響を受ける一方で、接続語においては、文語の規範を踏襲しているのである。これも白話小説の訓訳本における右訓の特徴の一つだと言えよう。

6、おわりに

以上、訓訳本の訓点の性格を明らかにするために、訓訳本の右訓に現われている新たな訓読語「ヨ」を中心に考察を行なった。同時期の四書五経の訓点本に見られなかった終助詞「ヨ」が訓訳本に使用されているのは、原文における中国語の助字「哩」「也」、特に「哩」の訓読に大きく関係している。訓読語としての「ヨ」は、原文からの制限を受けているので、「哩」の用法とほぼ同じである。また、訓訳本と同時期の口語資料との比較から、両資料における終助詞「ヨ」は、接続の制約において多少差異が見られるが、共通している所も多いことが分か

った。訓訳本に現われているこの特殊な訓読語についての考察を通して、訓訳本の右訓の性格の一端も明らかになった。すなわち、漢文訓読の範囲内に属する訓訳本の右訓には、口語的な要素(和文脈の表現)が見られ、当時の口語(和文脈)からの影響がある一方で、文語の規範も踏襲している。

終助詞「ヨ」以外に、訓訳本には従来の訓点資料に見られなかった特異な文末表現「ジャ」の用例も見られる。訓訳本の右訓の特徴をさらに明らかにするために、「ジャ」についての考察も必要だと思われる。それについては、今後の課題としたい。

参考文献

石川洋子(2015)『近世における『論語』の訓読に関する研究』新典社
相賀徹夫編(1986)『日本大百科全書』小学館
太田辰夫、飯田吉郎編(1987)『中国秘籍叢刊』汲古書院
太田辰夫(1988)『中国語史通考』白帝社
太田辰夫(2013)『中国語歴史文法』朋友書店：379-383
勝山稔(2010)「近代日本における白話小説の翻訳文体について-「三言」の事例を中心に」、中村春作等編「続「訓読」論：東アジア漢文世界の形成」勉誠出版：339-365
川島優子(2010)「白話小説はどう読まれたか-江戸時代の音読、和訳、訓読をめぐって」中村春作等編『続「訓読」論：東アジア漢文世界の形成』勉誠出版：311-338
齋藤文俊(2011)『漢文訓読と近代日本語の形成』勉誠出版
徳田武(1990)「宇野明霞訓読法の悲劇」『江戸漢学の世界』ぺりかん社：74-94
中村幸彦(1985)「近世語彙の資料について」鈴木丹士郎編『近世語』有精堂出版：201-211
長澤規則也(解題)(1972)『唐話辭書類集　第6集』汲古書院
長澤規則也(解題)(1972)『唐話辭書類集　第7集』汲古書院
前田桂子(2015)「噺本における程度強調表現「とんだ」について」『島大国文』(35)：1-22
馬静雯(2019)「終助詞から見る近世の白話小説訓訳本の特徴」『東アジア日本語教育・日本文化研究　第22輯』：111-126
丸井貴史(2014)「白話小説訓読考--「和刻三言」の場合」『読本研究新集』(6)：71-87
村上雅孝(1975)「山崎嘉点の性格」『文芸研究』(82)：62-71
——(2014)「訓訳と沢田一斎」『国語学研究』(53)：150-136
——(2015)「岡白駒と訓訳」『国語学研究』(54)：244-230
——(2017)「訓訳いわゆる左ビルをめぐって」『日本近代語研究』ひつじ書房:87-106
武藤禎夫、岡雅彦(編)(1976)『噺本大系　第八巻』東京堂出版
渡部温(訂正)(1977)『標註訂正康熙字典』株式会社講談社

＊本稿は中国国家留学基金（201608410122）の助成を受けたものである。

[1] 『覚後禅』の出版時期と訓訳者については不明な点が多い。中村(1985)、太田、飯田(1987)、村上(2014)にはこの問題についての記述がある。参照されたい。本稿の筆者は、陶山尚善の付訓という見方を踏まえ、この訓訳本『覚後禅』は宝永二年のものではなく、宝暦頃のものだと考える。

[2] 中村(1985)、太田・飯田(1987)を参照されたい。

[3] 前田(2015)：1

[4] しかし、興味深いのは、右訓の 20 例に対し、口語的な傾向を有している訓訳本の左訓の位置には、終助詞「ヨ」の例がかえって見られなかった点である。

[5] 『唐話辭書類集　第 6 集』『唐話辭書類集　第 7 集』を使用した。

[6] 渡部(1977)：446

[7] 太田(2013)：380-384

[8] 訳文は原文ママである。

[9] 太田(1988)：215

[10] 正しい句読点は「若蒙員外如此美情、我夫妻両口住在這里、可也増好些光彩哩」と考えられる。

[11] 相賀(1986)：521